風祝風神録

水のように澄み切った青空の下、黒い長髪と大きな赤いリボンを靡かせながら一人の少女が空を飛んでいた。
紅白の巫女服を身に纏い、幻想郷に住む者なら誰もが知っている、あの人物であった。
そう、彼女は『博麗霊夢（はくれいれいむ）』である。

人間であれば心強い味方であり、人外の者からすれば、絶対に出会いたくはない人間であった。
霊夢は時折、不機嫌そうに眉を歪め、雑念を払うかのように首を横に振っていた。
（……考えちゃ駄目、今は帰る事以外は考えない！）
溜め息を吐きながら、飛翔する速度を徐々に上げて行く。進路は博麗神社ではなく、全く別の方向にある、妖怪の山へと向かっていた。

本来ならば何も違和感のない筈の光景であるが、この幻想郷に至ってはとてつもなく異質な光景であった。
存在していなかった筈の霊夢が何故、この幻想郷に居るのか？
それは、霊夢が今まで雲隠れしていた訳でもなく、外の世界から幻想郷にやって来たからであった。

――少女の本当の名前は『東風谷霊夢』であった。

東風谷――と言えば早苗の苗字である筈なのだが、決して霊夢が成り済ましている訳ではない。

この霊夢は東風谷の人間として生を受け、東風谷の一族に伝わる一子相伝の秘術を習得し、風祝としての人生を過ごし、霊夢も早苗と同様に現人神となっていた。

そして、早苗の時と全く同じで、祀っている神様である八坂神奈子が外の世界で信仰を得る事が不可能と考え、共に幻想郷へとやって来たのだ。

つまり、今の早苗と霊夢は立ち位置が完全に逆になってしまっていたのだ。

なんという運命の悪戯か、霊夢は早苗の所へと向かい、早苗が行った時と同じ様に営業停止を言い渡しに行ったのだ。

しかし、早苗は霊夢の顔を見るなり癇癪を起こしたかのように激昂し、涙ながら言い詰め寄られた霊夢は、逃げるように博麗神社を立ち去ったのであった。

やがて山の麓まで辿り着くと、背後で何かの気配を感じて即座に振り返った。

「……」

注意深くぐるりと見渡してみたが、数羽のカラスが群れを成して飛んでいるだけで、おか

しな様子は何もなかった。
「気のせい……か」
早苗とのやり取りの所為で普段よりも神経質になっているだけと思い、再び山頂へと向かう霊夢であった。

――その後ろ姿を、数羽のカラスがジッと眺めていた。

§

霊夢は山を登り続け、やがて雲を突き抜けると、守矢神社の巨大な鳥居がその姿を覗かせる。その奥には、見慣れない巨大な物体が参道の脇に突き刺さっている様子が伺えた。
「あれは？」
何か胸騒ぎがして神社の入り口へ急ぐと、参道の両脇には巨大な柱が等間隔に突き刺さっており、それは入り口から拝殿まで続いていた。
「これは……御柱？」
御柱と呼ばれた柱は高さが数十メートルにも及び、直径は一メートルを超える大きな柱であった。ただの巨木が突き刺さっているだけではなく、まるで機械で作られたかのように精密な六角形をしていた。

それが入り口から本殿までずらっと並び、初めて見る者は間違いなく圧倒されるであろう。
霊夢は御柱を見上げながら本殿まで歩いていると、突然声を掛けられた。
「おや、霊夢じゃないか。今戻ったのかい？」
「かな……八坂様！　はい、ただいま帰りました」
柱の影から八坂神奈子（やさかかなこ）が姿を現し、報告を聞こうと霊夢の元へと歩み寄った。
「それで？　麓の巫女はどんな奴だったのかしら？」
「あ、えっと……」
博麗神社に偵察に言って来いと霊夢に命じたのは神奈子である。当然の問い掛けに霊夢は一瞬動揺してしまうが、何事もなかったかのように振舞う。
「……いえ、あのような見窄らしい神社はとても脅威になるとは思えません。祭神も不明確で、博麗の巫女も大した事はなさそうでした」
「そうかい、じゃあ麓の神社の事は後回しにするとするかね。先にこっちの問題をどうにかしないといけないしね」
「そうですね……それより、この御柱は一体？」
霊夢のその一言で、神奈子は嬉しそうに笑いながら御柱に寄り掛かった。
「これかい？　なかなかいいセンスだろう？　外の世界じゃこんな物を設置出来なかったからね」
「は、はぁ……」

「それに、これはただのオブジェという訳じゃないの、天まで伸びる巨大な御柱は神の厳威の象徴、この神社に訪れた者に、ここに居る神様は強大な力を持っていると、一目で認識させるためでもあるのよ」
「なるほど」
　センスは兎も角として、身内の霊夢ですら一目見た時に圧倒されてしまったのだ。きっと効果はあるに違いない。
「八坂様、一つ変な事を聞いてもよろしいですか？
「ん？」
　霊夢は真剣な眼差しで神奈子を顔をジッと見た。
「……私に、生き別れの姉か妹って居たりしませんか？」
「生き別れ⁉」
　あまりにも突拍子な質問に、神奈子は思わず後ずさってしまった。
「そ、そんなの居る訳ないでしょう。突然どうしたのよ」
「……何でもありません。変な事聞いて申し訳ありませんでした」
　霊夢はそう言って深く頭を下げた。
「霊夢、麓の神社で何かあったのかい？」
「いいえ……なにも」
　霊夢はふと空を見上げると、西の空が段々と紅に侵食され始めていた。スカートのポケッ

トから折り畳み式の携帯を取り出して開くと、圏外と表示された携帯の画面には、十六時四十分と大きく書かれていた。
「……少し休憩を取ったら、夕飯の支度に移ります」
「あ、ああ、よろしく頼むよ」
「はい、では……」
霊夢は早足で本殿の方へと戻って行く。その姿を神奈子は腕を組みながらまじまじと見つめ、やがて霊夢が見えなくなると、独り言のように呟いた。
「……で？　実際には何があった？」
しかし、その場には神奈子以外に誰かが居るような様子はなかった。
「隠れても無駄だって、お前自信分かっているだろう？　諏訪子」
神奈子がそう言って隣の御柱を見据えていると、柱の影から、二つの目玉が付いた市女笠を被った少女がひょっこりと姿を現した。
「なんだバレてたのか」
ケラケラと笑いながら神奈子の前に現れた少女は洩矢諏訪子（もりやすわこ）であった。
「気配も隠さないで何が『バレてたのか』だよ。それよりお前、こっそりと霊夢の後を付けてたんだろう？」
「さぁ？　何の事を言っているのか私にはさっぱりー」
「はぁ……よくもまぁ、そんな白々しい嘘を吐けるもんだ。霊夢のあの様子、麓の巫女と本

当は何かあったんだね」
「だったら、本人に直接聞けばいいじゃん」
「馬鹿、私に話せない事があるから黙っているんだろう」
「あー、思春期の娘を持つ母親みたいだねぇ～」
「誰が母親だ！」
神奈子の拳骨が諏訪子の頭上に炸裂した。
諏訪子の特徴的な帽子に深く食い込み、まさに凹という字に当てはまるような形に変形した。
「いったーい！　なにするんだよ！」
「お前が変な事を言うからだ。いいからさっさと言え」
「ちっ、それが人にモノを頼む態度かねー」
諏訪子は神奈子に背を向け、茜色に染まる空を見上げながらゆっくりと話し出した。
「ねぇ神奈子、この幻想郷という所に、霊夢以外の東風谷の人間が居たとしたらどう思う？」
「諏訪子、あんたも早苗と同じような事を聞くのね。自分の子孫なんだから、諏訪子の方がよっぽど分かっているんじゃないのか？」
「ふむ、たしかに神奈子の言う通りだ。結論から言うよ？　麓の巫女は――紛れもなく私んところの血が流れてる」
諏訪子が驚愕の事実を言い放つと、神奈子は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする。

「な……なんだって⁉　それはどういう事⁉」
「それは私の方が知りたいってば」
「……幻想郷は、だいぶ昔に外の世界から隔離されたと聞いたけど、その時にこちら側に残ってた奴が居たのか？」
「それは――どうだろうね。ないと思うけど」
諏訪子は被っていた帽子を逆さにして、ボールを回すように人差し指でくるくると器用に回し始めた。
「麓の神社で巫女の奴と霊夢が言い争ってたよ。というよりも、巫女の方が一方的に霊夢に言い寄ってたみたいだけどね。奴は泣きながら私や神奈子の事を叫んでたよ。霊夢の事も知っている様子だった。それに、東風谷は私だ――ともね」
「博麗の巫女が、私達の事を知っていたと言うのかい？」
「何でかは知らないけど、そういう事になるね」
「霊夢の奴に行かせたのは失敗だったかもしれないね。まさかそんな事になるとは……さすがの私も予想外だったわ」
悩みの種が一つ増えてしまった事に頭を抱える神奈子を他所に、諏訪子は回転している帽子を指で弾くと、帽子はちょうど引っくり返って諏訪子の頭にすっぽりとはまった。
「んでさ、どうすんの？　私も少しモヤモヤしてるし、話をつけてくるならもう一回行って来るけど」

諏訪子の提案に、神奈子は首を横に振った。
「いや、今はいい。霊夢が立ち去った後をつけて来なかったという事は、そこまで深刻な問題じゃないんだろう。それよりもこっちの方が優先だ」
神奈子は周囲の木に止まっている鴉を睨みつけると、目が合った鴉は脅えるようにその場から飛び去って行った。
「なに、まだ話が付いてないの？」
「見事に警戒されているようでね、下っ端天狗の一人も見掛けやしない」
「はーん、そのクセにああやってこっちの監視しているなんて、随分な奴らじゃないか、ここはやっぱり、恐怖のどん底に陥れて信仰を得るってどう？　その方が私は楽なんだけどさー」
諏訪子は邪悪な笑みを浮かべるが、神奈子は溜め息を吐いてそれを否定する。
「そんな事出来る訳がないだろう。全盛期ぐらいの私達なら妖怪だらけの山の一つや二つは制圧出来たかもしれないが、ただでさえ少ない力をこっちに来る時にかなり使っているんだ。万が一返り討ちにあってみなさい。幻想郷で信仰を得る事は不可能になるわよ。それに私はそういう方法は好かんのだ」
「甘いねぇ～そんなんだから外の世界で信仰を得るのが難しくなるんだよ」
「うるさいね、うちの方針を決めるのは私だよ」
「あー、はいはい、そうでしたね～。んじゃ、霊夢のご飯が出来るまで私は適当にぶらぶら

してるよ」
諏訪子がそう言いながら袖をひらひらと振ると、参道脇の森林の中へと消えていった。
神奈子はその姿を見ながら「相変わらず勝手な奴」と呟くと、まだ設置し終わっていない御柱を埋めに戻るのであった。

§

自分の部屋に戻った霊夢は、大幣を床に放り投げるとその場で俯いた。
「……」
自然に腕に力が篭る。押し込んでいた感情が一気に込み上げて来ると、拳を柱に叩き込んでいた。
「くそっ……！　何なのよあいつ……‼」
あいつとは――もちろん早苗の事であった。
あの時は宣戦布告をしに行ったようなものなのだ。軽く口論になる事ぐらいは覚悟はしていたが、結果は予想の斜め上を行く結果になってしまった。
「あいつ、私だけじゃなくて八坂様と洩矢様の事まで知っていた……それにあいつも風祝ですって？　そんな馬鹿な話がある訳ないじゃない」
昂る感情と共に、早苗との出来事が嫌でも蘇ってきてしまった。

「ちょっと！　そこで呑気に賽銭箱を覗いてるあなた！」
最初に声を掛けたのは霊夢であった。霊夢の顔を見た時の早苗は、まさにこの世の者ではない者と遭遇したかのような表情に変わっていた。
そんなに驚かれるほど変な顔ではないと思っていた霊夢は次の瞬間、突然涙を浮かべる早苗に戸惑いを隠せずにいた。
「どうして……どうしてあなたがそこに居るんですか……？　どうして、あなたが――‼」
早苗が悲痛な叫びを上げると、今度は逆に霊夢が驚いて後ずさる。
「な、なによ。私がここに居ちゃいけない理由があるっての？」
「なんで……このタイミングで霊夢さんが来るんですか？　何で私じゃないの？」
「は、はぁ？　あんたこそ何を言ってるのよ！」
早苗はゆらゆらと霊夢に近付いて来るが、霊夢の足は棒のようになって動かない。
言い知れぬ恐怖が霊夢を包み、スカートで隠れているが両膝がガクガクと震えていた。
「わ、私は東風谷霊夢、ちょっと前に幻想郷にやって来たんだけど、今日はほんの挨拶に――」
本当は営業停止、及び神社の乗っ取りを考えていたのだが、目の前にいる変な奴に、とてもそんな事が言えるような度胸は無かった。
「東風谷……霊夢……？」
早苗がそう呟くと、俯きながら同じ事を二度三度と繰り返していた。
「な、何なのよあんた……きゃっ⁉」

早苗は飛びつくように霊夢の両肩を掴んだ。
「そんな出鱈目言わないで‼　あなたは博麗霊夢でしょ⁉　東風谷は私……東風谷早苗であって、あなたが東風谷な訳ないじゃない‼」
「な、何を馬鹿な事を言ってるのよ、博麗はあんたでしょ……！」
「それは……霊夢さんが居なかったから、私が代わりで務めていただけじゃないですか」
「私が博麗の巫女だと言いたいの？　冗談は止めてよ。私は風祝っていう大事な役職に就いているんだから」
「霊夢さんが風祝……？　やめて下さいよ。そんな笑えない冗談は……あなたが一族に伝わる秘術が……奇跡を起こせる訳がない」
「……あんた、どこでそれを……」
「どこで？　そんなの決まってるじゃないですか。幼い頃、母が亡くなる前に受け継いだ秘術よ‼」
早苗は自分で言ってしまってから気付いてしまった。その受け継いだ筈の秘術の全てを忘れてしまっているという事に。
無意識に霊夢を掴んでいた両手の力が緩んでしまうと、霊夢はその隙に早苗の手を振り解いてその場から飛び退いた。
「……あんた、初対面だけどすっごいムカつくわ。まるで人の心の中を土足で踏み荒らされているみたい」

霊夢は大幣を天に掲げ、目を閉じると呪文の詠唱を始めた。
「その術は！」
早苗が驚いている間もなく、霊夢の頭上に輝く星が現れた。

奇跡「白昼の客星」

霊夢がスペルカードを宣言する。
霊夢の頭上に光り輝く星が宿り、白く輝く光線となって霊夢の周囲に照射された。
紛れもなく自分が使っていた物と同じスペルカードであった。
「！」
考え事をしている間にも容赦なく光線は早苗の元へと降り注ぐ。回避が間に合わずに咄嗟に防御結界を張ってやり過ごす。
しかし、次々と降り注いでくるかと思いきや、客星はすぐに収まってしまった。
「え？」
「これで私が風祝だっていう事が分かったでしょ？　さぁ次はあなたの番よ。見せてみなさいよ。同じ秘術を」
「そ、それは……」
早苗は動揺を隠せなかった。一番簡単な秘術ですら使えないのに、いざ見せろと言われて

も出来る訳がなかった。
唯一、使える『九字刺し』という術も、東風谷の家にのみ伝わっている術ではなく、呪文さえ知っていれば、誰でも使う事が可能な術の一つであった。
それを見せたところで風祝という証明をする事は不可能に近い。
「ほら見なさい。デタラメを言ってるのはやっぱりあんたじゃない。私は八坂様を祀る風祝、東風谷霊夢よ。覚えておきなさい」
霊夢は一転して余裕の表情を見せるが、早苗は霊夢が発した言葉でハッと何かに気付く。
「……そうだ。神奈子様！　それに諏訪子様も居るんでしょ⁉　お二人に私の事を話せばきっと――」
早苗の言葉を遮るように、今度は霊夢が叫んだ。
「八坂様と洩矢様の名前を気安く呼ばないで‼　あんたみたいな偽者風情にその名を呼ぶ資格なんてないわ！」
「私が……偽者？」
霊夢の『偽者』という言葉に、早苗がその場で膝をついてしまった。
「あんたが東風谷の秘術を使えない以上、風祝を名乗るなんて痴がましいのよ」
「……」
早苗は何も言い返せなかった。全て霊夢の言う通りであり、秘術こそが風祝の全てであり、他に証明する出来るモノは一切なかった。

「兎に角、今日のところは大人しく引き返すけど、次に会った時にまだ自分が東風谷の人間なんて戯言を言うのなら……容赦しないわよ」
霊夢は冷やかな目で早苗に告げると、その場から逃げるように去って行くのであった。

これが霊夢と早苗のファーストコンタクトであった。
最後は霊夢の一転攻勢となっていたが、得体の知れない早苗からさっさと離れたのは正解だったと今でも思っていた。
「最後は変に煽っちゃったけど、大丈夫よね……」
カッとなって思った事を口に出してしまったが、今思い返すとかなり相手を煽っていた事に気付く。
（私は悪くない。あいつが訳が分からない事を口走るのが悪いのよ）
こんな事があったという事を神奈子には黙っていた。霊夢自身きっと上手く説明出来ないだろうし、まだまだ問題が山積みな状態で、新たな問題を持ち込むのはなるべく避けたかった。
ただ、霊夢は一つだけ確信している事があった。
（ほぼ間違いなく、今度は向こうから仕掛けてくるでしょうね）
それが今晩かもしれないし、数日後になるかもしれない。早苗の口振りからすると、神奈子か諏訪子に接触するのは間違いないだろう。

「……来るならいつでも来なさい。たかが人間の巫女なんかに現人神であるこの私が負ける訳が無いんだから」

霊夢はニヤリと笑うと、モヤモヤとした気持ちが段々と晴れていった。

博麗の巫女は、幻想郷でも最強の一角と言われている実力者と聞いていたが、それがあのザマであったのだ。

所詮は井の中の蛙であろう。歴代の風祝でもずば抜けた力を持った霊夢に敵う筈が無い。今の霊夢はそう思っていた。

やがて、悩んでいる事が馬鹿馬鹿しくなり始めてしまった。漸く霊夢は平常心を取り戻し、夕食の支度をするために部屋を出て行くのであった。

――井の中の蛙。

その言葉が自分に跳ね返って来る事になるとは、この時の霊夢は知る由もなかった。